とすの文化財解説シート　指定文化財シリーズNo.9

萬歳寺（まんざいじ）の文化財

鳥栖市教育委員会

鳥栖市の奥座敷、河内町の標高350mあまりの高所に位置する本城山萬歳寺（臨済宗南禅寺派）は、応永年間はじめ（1394～1402）に、以亨得謙（いこうとくけん）禅師（？～1402）を開山に臨済宗の寺院として創建されたと伝えられます。もっとも、萬歳寺はもともと建久９年（1198）に天台宗の寺院として創建されたともいい、正確な寺伝は不詳です。現在地には近世になってから移転したとみられ、当初の伽藍（がらん）については、今泉町付近との説があり、あるいは以亨得謙禅師が肥後に創建したと伝える寺院名と同じ字名の残る、現在地から麓に下った神辺町国泰寺（こくたいじ）付近にあったとも考えられます。

萬歳寺は近世以降のある期間、無住の状態が長く続き、一時は荒廃寸前の時期もありましたが、こうした危機を乗り越えて、以亨得謙禅師ゆかりの品々をはじめ、創建当初からの遺品が少なからず、600年あまりの時を越えて、まさに奇跡的に伝来していることが近年の調査であきらかとなりました。

萬歳寺所蔵の指定文化財（現在は佐賀県立博物館に寄託）

絹本著色見心来復像・絹本墨画淡彩以亨得謙像	国指定重要文化財（絵画）	昭和62年6月6日指定
黒麻地二十五条袈裟	県指定重要文化財（工芸品）	平成4年5月27日指定

絹本著色見心来復像

中国・元時代　縦94.6　横45.3cm　国指定重要文化財（絵画）

海目精白、庠顱巉嵓、石室林谷、衲衣雲嵐、開法璘師
之後、分燈禅宗之南、寘之空山、則安一錫之卓、升之
高坐、則放千衆之参、槁木其形、飜瀾其談、余則謂之
禅老、而叢林尊以蒲菴

日本以亨謙上人将東還、繪
見心復禅師圓像、請余書翰林承　旨潞國蛻菴張公所
製讃于上、以寓其瞻仰之意云、至正二十五年龍集乙巳
春正月己卯制河楊　書

印文
不詳

常彦

○○室

教不看、禅不會、少慈悲、多懈怠、量窄而似
寛、見廣而以隘、斂滄海於一漚、納須彌於一
芥、長身短身、鑑照無礙、謂是蒲菴則觸、
謂非蒲菴則背、捏聚虚空貌則真、話行却
在搏桑外

謙以亨蔵主、東還日本、繪予陋質需
語、勉書此以答其意

皇元至正乙巳仲春　定水住山来復

沙門
来復

見心
心

見心来復（1319～1391）は、詩文に優れた中国の高僧で、以亨得謙の師にあたります。この肖像画は、仏法を伝授した証として師が弟子に授ける頂相（ちんそう）と呼ばれるもので、以亨得謙の帰国に際して制作されたものです。上部の讃（さん）（画中に題する詩文）は、左側が見心来復の自讃、右側は遼・金・宋の歴史書の編纂にたずさわった張翥（ちょうしょ）が作成し、能書家の楊彝（よういい）が書いたものです。以亨得謙周辺の文人交流の広がりを知ることができます。本像には、実像を意識した大きさやこまやかな毛髪の描法など、迫真の表現がみられ、禅僧の分身である頂相にふさわしいすぐれた作品となっています。

右側の讃は、定水寺における見心来復の禅風が盛んな様子と、その人柄の高潔さを称え、楊彝の款記（かんき）には、帰国の途についた日本僧の以亨得謙が見心来復を描かせ、至正25年（1365）正月、制河（浙江（せっこう）の異称）の楊彝に張翥のつくった讃を書く事を請うたという、画像製作と著讃の事情が記されています。

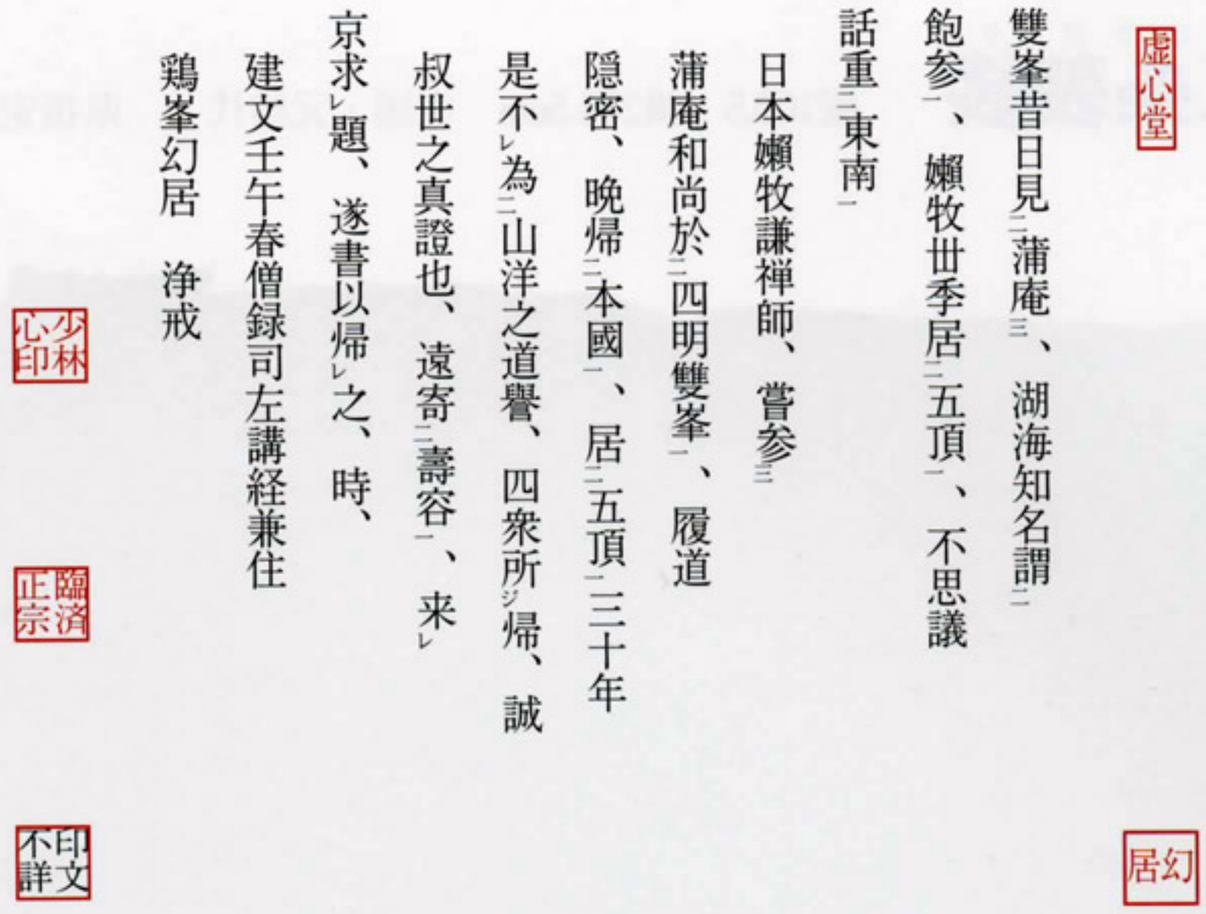
左側の讃は、当時46歳の見心来復直筆の自讃です。禅の修業の至らなさを自嘲（じちょう）したあと、大小、長短という数量を超えてあまねく宇宙は存在するという見心来復の禅風が説かれています。このあとははじめの讃同様の画像製作と著讃の事情が記されます。

（見心来復自讃部分の読み下し文）

教は看（み）ず、禅は会わず。　慈悲少なくして懈怠多し。　搾（せま）きを量（はか）れば寛（ひろ）きに似、廣きを見れば隘（せま）きに似る。　滄海を一漚に斂（おさ）め、須弥を一芥に納む。　長身短身、鑑照無礙。　是を蒲庵（しょうあん）と謂えば則ち触れ、蒲庵に非ずと謂えば即ち背く。　虚空に貌（かお）を捏衆すれば則ち真なり。　話行は却って博桑の外に在らん。

絹本墨画淡彩以亨得謙像

室町時代前期　縦85.6 横40.7cm　国指定重要文化財（絵画）



臨済禅二十一世以亨得謙禅師（？～1402）は、五山文学の興隆に貢献した、この時代を代表する禅僧の1人です。30年におよぶ中国滞在で、詩僧として名高い見心来復のもとで臨済禅を修行し、1365年に帰国したあとは、建長寺など鎌倉や京都の禅寺で活躍し、度重なる詩会を主催して、中国の禅林をめぐる文人文化の移入を積極的にすすめました。当時、もっとも詩藻にあふれた五山文学僧に数えられ、また美術史的には日本における詩画軸成立の実質的な創始者という評価をも受けています。のち九州にくだり、肥後に国泰寺を開き、晩年の応永年間はじめ（1394～1402）に萬歳寺を創建しました。そしてこの地で90年に近い天寿を全うしたと伝えられます。

ここには、座禅中の眠気を覚ますために樹下を瞑想しつつ静かに歩む「経行（きんひん）」という修行をおこなう姿が描かれており、右手に柱杖をとって松下を経行して歩む以亨得謙の様子が彩色を多用しない線描中心の描写により巧みに写しだされています。この画像は面貌や体部などの部分的な視点のみに終わらず、像主をとりまく広い視点から写実的態度のもとで客観的に対象をみつめて描かれており、像主の肖像性と自然景の描写は分離することなく調和しています。

図の上部には中国・明の高僧、定厳浄戒が讃文をしたためており、以亨得謙（文中には悚牧謙（らいぼくけん）禅師とあります）が30年にわたって中国に滞在し、見心来復より禅を学んだことなどが記されています。おそらくは以亨得謙禅師が入明する門弟に託して、この画像を遠く明の南京に送ってかの地の高僧である定厳浄戒に讃を依頼したのでしょう。当時の中国と日本の間には現代の私達が想像する以上に人と人との交流が盛んであったことがしのばれます。著讃がなされたのは建文4年（1402）春とあり、寺伝に同年7月24日に没したとある得謙禅師のまさに最晩年の姿を写したものです。著讃の上、中国・南京より肥前・萬歳寺に送り還されて来た自らの画像を禅師は再び見ることが出来たのかどうかは伝わっていませんが、見心来復・以亨得謙師弟の画像は幾多の危機を乗り越えて600年にわたって「対のかたち」で今日まで遺されてきたのです。

黒麻地二十五条袈裟（くろあさじにじゅうごじょうけさ）

縦100.5　横276.5cm　中国・元時代　　県指定重要文化財（工芸品）

墨染、麻製の二十五条よりなる割載衣（かっせえ）（反物を長短の布片に裁ち切って縫い合わせて製作した袈裟）です。墨染の質素な袈裟ですが、黄色の絹糸による縫目がアクセントとなって黒地にはえています。縫い方は黄色の絹糸で各段隔ごとに墨染したＬ字型の裂の縦葉と横葉を続けて返し縫いしており、表の糸目は点線、裏の糸目は鎖縫い風となっています。裏側には着用時に紐を結ぶ環佩（かんはい）の座が残っていますが、ここに以亨得謙禅師の号である「悚牧（らいぼく）」の縫い取りがあることから、得謙禅師自身が着用したものであろうと考えられています。中世の日本ではみられない刺繍（ししゅう）の技法がもちいられており、禅師が中国から持ちかえったものとおもわれます。現在まで大切に伝えられてきているところから、あるいは帰国時に師の見心来復より頂相と共に贈られた伝法衣（でんぽうえ）（仏法を伝授した証として師が弟子に授ける法衣）の可能性も考えられます。製作時期がほぼ特定できる中世の染色資料としても貴重なものです。萬歳寺にはこの他にも室町～江戸時代の法衣類が４領伝えられています。

萬歳寺の仏像

萬歳寺には創建当初より伝存するものとおもわれる仏像が4体まつられています。このうち宝冠釈迦如来像、地蔵菩薩像および傅大士像は、作風や構造上の特徴から、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて臨済寺院で活躍し、足利将軍家にも重用された「院派仏師」により同時期、同仏所でつくられたものと考えられます。当代一流の仏師が起用されているところからも、この時代を代表する禅僧の1人である以亨得謙禅師の創建になる萬歳寺にふさわしく、京都五山文化との密接なつながりが想像されます。また、誕生仏は朝鮮・高麗時代にかの地で製作されたもので、当時の北部九州地域と朝鮮半島との交流の深さがしのばれます。

宝冠釈迦如来座像

檜材、寄木造り、漆箔、像高39.0cm、室町時代前期。頭上に宝冠を戴く宝冠釈迦如来像は、中世の禅宗寺院の本尊仏として信仰されたものです。本像は萬歳寺創建当初の本尊仏である可能性が考えられます。現在宝冠の部分は失われています。

地蔵菩薩像

檜材、寄木造り、漆箔、像高13.0cm、室町時代前期。菩薩とは如来（修行を完成し、悟りをひらいた仏）になる前の、修行中の人をさします。菩薩像は出家前の釈迦の姿をもとにつくられますが、地蔵菩薩のみは例外的に僧侶の姿をしています。本像は戦後になって金泥を塗り重ねるとともに若干の補修がなされており、手にもつ錫杖や宝珠はその時のものです。

傳大士像

檜材、寄木造、漆箔、像高33.8cm、室町時代前期。傳大士（497～569）は、姓を傅、名を翕という中国・南北朝時代の人です。「大士」は有徳のすぐれた人物をさす尊称です。輪蔵（経典を収める棚が回転するようにつくられた経蔵）を創始したといわれるため、中世の禅宗寺院では傳大士の像が輪蔵内に守護神としてまつられていました。このため、本像が伝存する萬歳寺には、創建当初の伽藍に輪蔵が存在していた可能性が十分考えられます。

誕生仏

銅製、鍍金、像高9.9cm、朝鮮・高麗時代。朝鮮半島で製作されて請来した仏像です。誕生仏は、釈迦の誕生を祝って４月８日におこなわれる灌仏会（花祭り）の本尊仏で、誕生した釈迦を竜王が洗い清めたという故事にならって甘茶を注ぐため、腐食しにくい銅でつくられます。この誕生仏は本体から足ほぞまで、蝋型による一鋳で鋳出したあと、細部の仕上げに魚々子鏨をもちいています。帽子のようにふくらんだ頭髪、低く盛りあがった肉髻、まっすぐにのびた手足、大きくつきでた腹部、高麗のものに多くみられるトランクス形の短い裳など、造形が直線的で明快で、幼児の単純な動作を思わせるとともに可憐さを醸し出しています。誕生仏の中には理想化された造形のものもありますが、本像は彫りの浅いやわらかい顔貌の表現で親しみやすく、庶民にまでひろがったこの時期の仏教の教えを反映しているようでもあります。

編集・発行　鳥栖市教育委員会　　写真提供　萬歳寺　佐賀県立博物館

2002.1.